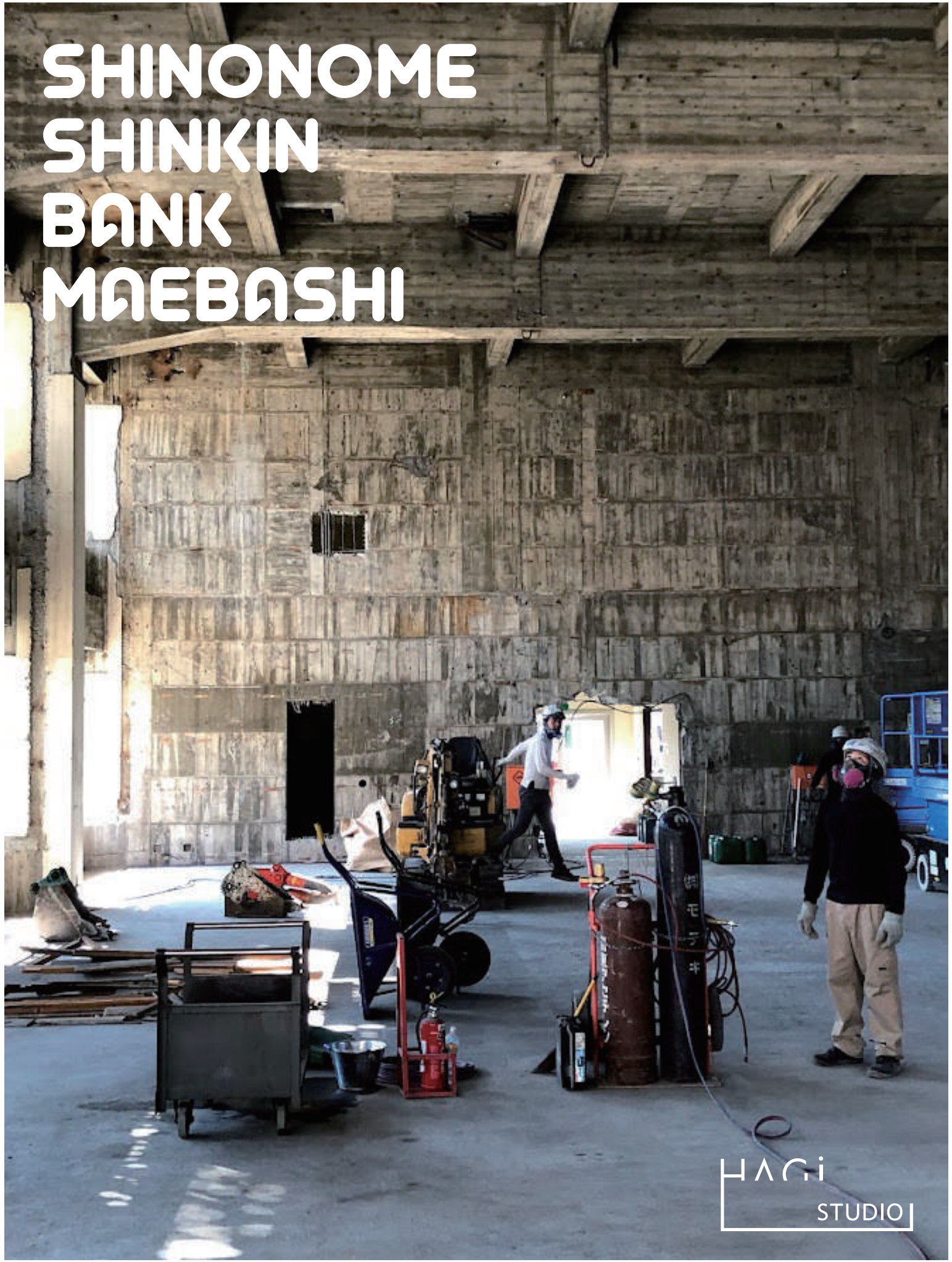


SHINONOME SHINKIN BANK MAEBASHI



建築物の本来の価値を見出す

本建築（しのめ信用金庫前橋営業部ビル）は、東京オリンピックが開催された昭和39年（1964年）に竣工している。しのめ信用金庫として合併する前の「前橋信用金庫（2002年よりぐんま信用金庫）」の本店として構えられ、設計は現久米設計の久米建築事務所が行い、施工は地元的小林工業が行った記録が残っている。当時としては意欲的な鉄骨鉄筋コンクリート造（SRC造）で、金庫肝いりの建築物であったことが伺える。

しかしながら築50年を越え、設備面でも老朽化が否めなくなり、2015年に行った耐震診断により危険性ありという判定を受けてしまったことから、建て替えが検討されていた。HAGI STUDIOがプロジェクトに参画したのはまさに建て替えやむなしという議論のなかだったが、SRC造による迫力ある無柱空間や、既存図から伺える建築物本来の魅力、また前橋の地にすでに50年親しまれてきたという時間の蓄積自体が価値であると感じ、建て替え案とともに改修案も提案することとなった。構造設計者の所見などから、既存の構造には致命的な欠陥は見当たらず、壁量のバランスを取り戻すことで耐震基準を満たせることが明らかになり、改修案はより現実味を帯びてきた。

金融機関の支店という存在を越えて

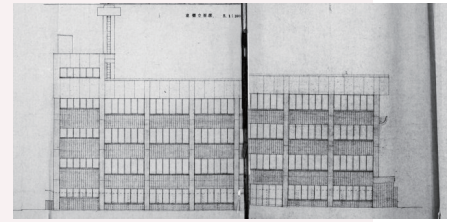
本計画の初期段階から近隣のエフエム群馬社屋の移転計画が敷地内に組み込まれ、地域メディアとしてのエフエム群馬社と、地域金融のしのめ信用金庫というこれまでにない組み合わせが実現することとなった。異なる二社が一つのエリアを共有し、どのように地域や経営に相乗効果をもたらすことができるのかが問われる。このように複雑な事情が絡みながらも、建築の完成をゴールとしない持続的な取り組みとするために、プロジェクトデザインの第一人者であるトーンアンドマター広瀬郁氏に計画初期から参画を依頼し、両社の経営層、実務層を交えワークショップを重ねながら計画を練り上げていった。

また、本プロジェクトの重要な目標は、地域に根ざす地域金融としての信用金庫の本来の可能性を呼び覚ますことだった。信用金庫は法人格として都市銀行や地方銀行と違い株式会社ではないことから分かるとおり、「地域との共存共栄」を目的とした協同組織である。このような組織だからこそ、自社の利益を追求するだけでなく、地域の魅力を高め地域に愛される場を提供することで長期的な視点に立った総合的な発展を目指すことができる。そのため旧来の金融機関の支店という常識を越え、新たな場を発明する必要があったのである。

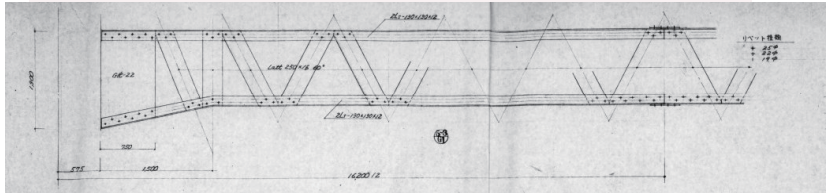
1964



建設当初の写真



レンガタイルが多く使われていたファサード

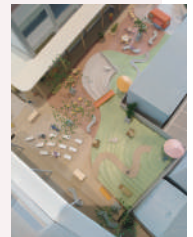


既存図にみられる16mを超える鉄骨鉄筋コンクリート造のハンチ梁

2019



2019年時のロビー写真



広場の初期スタディ

2020



煉瓦造の旧銀行倉庫（前橋市）



外観スタディの模型

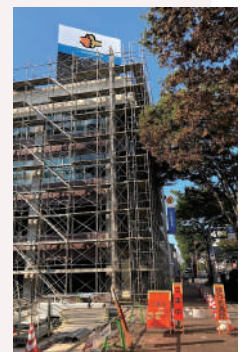
2021



素材検討時の写真



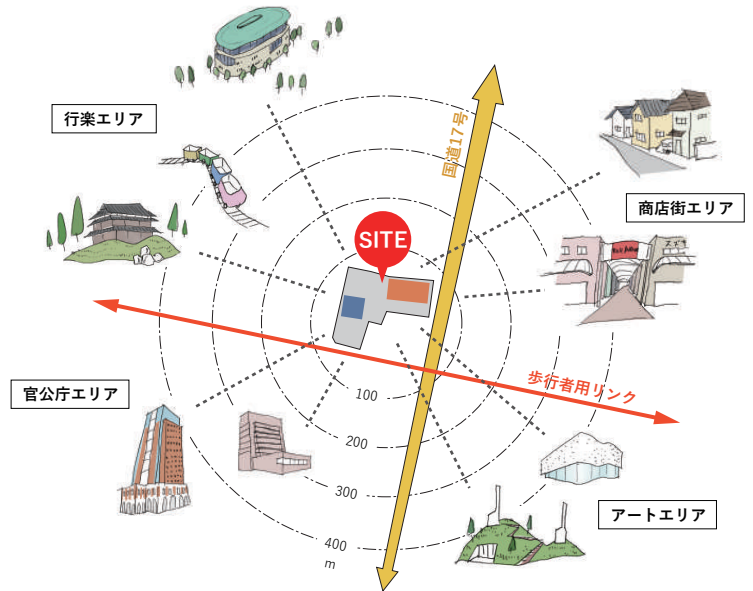
解体現場での構造確認



仮設足場と撤去予定の看板

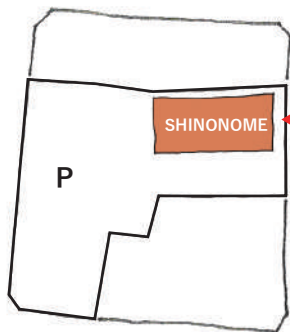
中継地点となる敷地

地域の魅力を高めるプロジェクトとするために、まずは建築の周辺エリアの中での役割を見出すことから計画は出発している。本建築が建つのは前橋市中心部である千代田町。東側に国道 17 号が面しており、中央大橋につながる公園通りとの交差点とも近い重要な立地である。しかしエリアの特徴を見出そうと思うと少々難しく、商業の中心部である商店街エリアと、県庁や市役所の立ち並ぶ官公庁エリア、るなばあくや臨江閣を擁する行楽エリアのちょうど中間地に位置しており、どのエリアにも属しておらず明確な特徴に乏しい。しかしながら、見方を変えてみるとそれらの重要なエリアを中継する地点であるという特徴が浮かび上がってきた。敷地南側道路は前橋市が 2019 年に策定したアーバンデザインの中で各地域を結ぶ「歩行者用リンク」としても重要視している道路でもあり、これからの前橋の発展のためにも各エリアを繋ぐという重要な役割を担う場所であることが分かる。

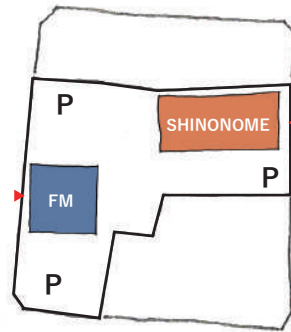


交差点としての広場

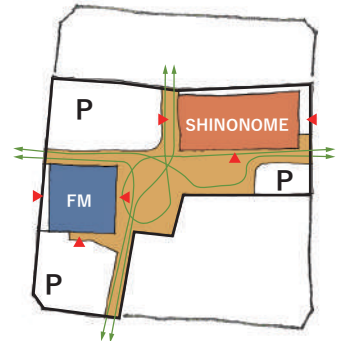
そんなポテンシャルをもった街区 / 敷地であったが、既存建築物は東側の国道 17 号側に面して正面性（ファサード）があり、長手面である南側は駐車場として利用されるのみで入り口も小さな通用口しか用意されていなかった。西面や北面は明確に「裏」として扱われ、街区のほとんどは市民には無関係の場所となっていた。通常の計画であればそれでも機能は満たせるものの、本計画はより強く人々を引き込む場が必要であると感じ、街区の内外を反転させ、街区の中に「表」を生み出すため、中心に広場を設けることとした。広場は街区を囲む歩道空間と接続し、歩行者が安心して歩けるようにすることで、敷地内に人々を呼び込む。これによって、これまで裏であった南面や西面も新たなファサードとなり、建築が歩道空間に面する表面積は格段に広がる。エフエム群馬社屋もこの広場を挟んでののめ信用金庫と対角に配置することで、開かれた広場の魅力とともに享受し、発展していく未来を想像した。



敷地の大半が駐車場



エフエム群馬社屋の新設



中央にレンガ広場を計画





都市の中の憩いの広場

中継地点としての役割を担う広場を定義づける上で、ランドスケープ・アーキテクトの SfG大野暁彦氏との対話のなかで、年中イベントが行われる広大な芝生広場ではなく、ニューヨークの Paley Park に代表されるような「都市の中の憩いの広場」という広場像が見いだされた。

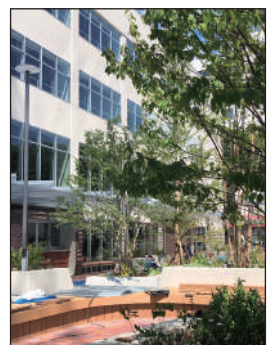
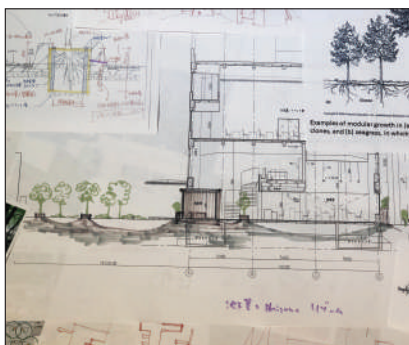
前橋商工会議所が打ち出す Green&Relax 構想* にも呼応するように、夏の暑さが厳しい前橋において、木陰が落ち涼しさを届けるために高木を点在させ、ウッドデッキが適度な高低差を生み出すことで多様な場を提供する。また、2つの社屋とも広場に面した外壁には庇を巡らせベンチ

を配することで、街区の外から人の拠り所が広場まで連続するように計画されている。

舗装は前橋全域での共通言語として利用され、国道 17 号の歩道にも使用されているレンガタイルを全面的に利用し、敷地外の他の拠点とも連続性を持つものとした。

広場にはそのレンガタイルを突き破るように不定形のコンクリートの植樹帯が隆起しており高木や低木地被類が植樹されている。われわれはこの分散する植樹帯をリゾーム（地下茎）と呼び、この地で 50 年以上建ち

左：リゾームの構想段階の初期スケッチ
中：ウッドデッキとリゾーム、レンガが組み合わさってきた「つどにわ」のイメージパース
右：現場写真





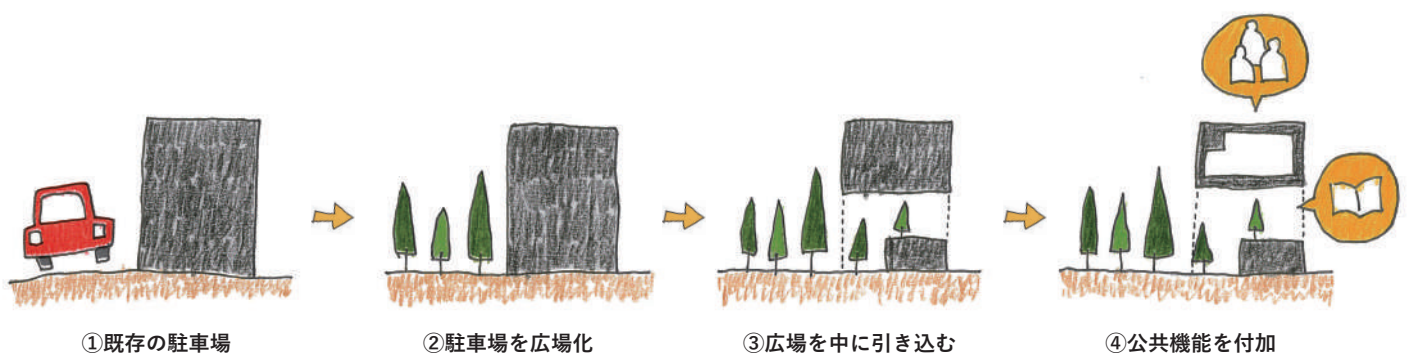
建物内外の連続性

続ける信用金庫の建物を主幹とし、あたかも地下でつながる大樹の一部のように見せることで「この地に根ざす」ことの表象とした。

ちなみに広場は前述の広瀬郁氏の監修のもと、しのめ信用金庫とエフエム群馬社の実務を担う若手社員を集めた協議体のなかで「つどにわ」と名付けられている。

*Green & Relax 構想… 2019年に前橋商工会議所より提案されたまちづくり戦術の一つ。前橋市に、“森の中のまち”を実現させ、都市の刺激を受けながら、緑の力で豊かな生活ができることを目的とした新たなコンセプト。

広場が生み出す街路性を建築物の内部にまで浸透させるため、1階ロビーは外部である広場と等価に扱われている。床は広場と同じレンガタイルを使用し、リゾームや外灯もロビー内にまで配置されている。信用金庫としての営業部機能は南側外壁ラインから一步引いた位置に県産材を利用した木ルーバー壁として新設し、建物の中に入れ子状に建物が建つように見せることでロビーの外部性をより高めている。ロビーの外部性は増床された2階のライブラリーまで一体的に連続することで、広場と繋がりがつつも内部の快適性をもった不思議な空間を創出している。



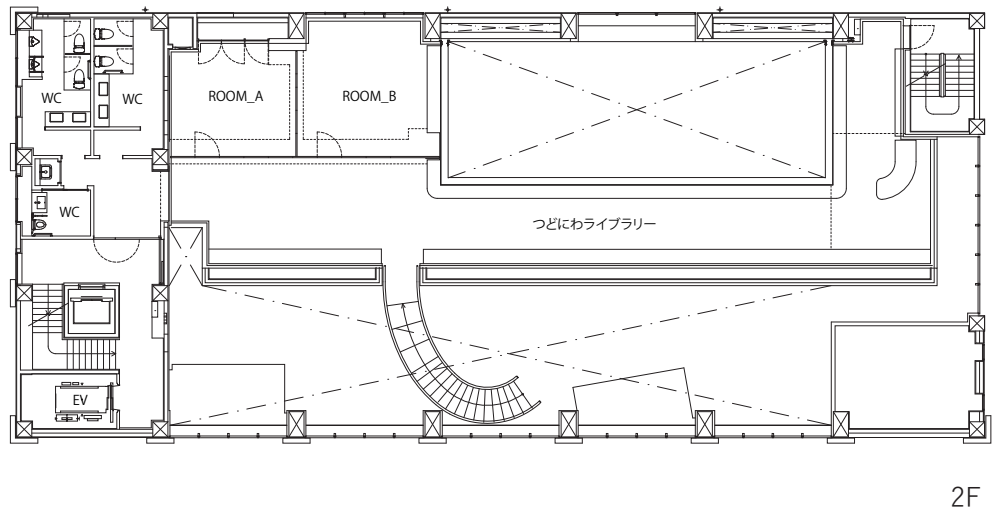
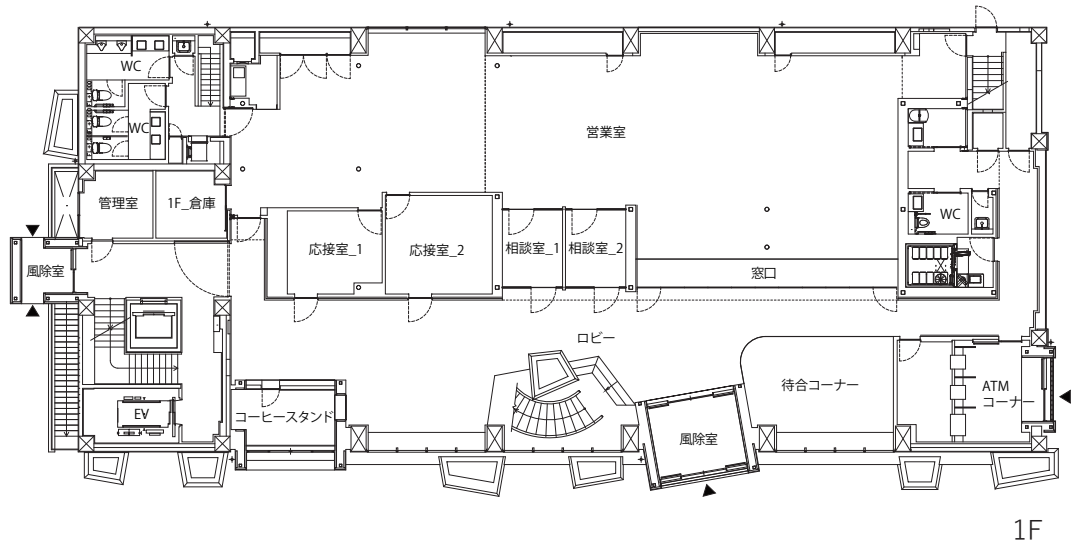
各階の構成

4階建てとなる本建築は、全体として広場や国道の樹木との親密性は共通しながらも、各階ごとに特徴をもった構成となっている。

一体的に連続した1階と2階は、この建築を特徴づける最も重要な空間であるといえる。広場につながる1階のロビーには、しののめ信用金庫前橋営業部、コーヒースタンド、ATMコーナーが配置されている。ロビーは南・西側に配置された風除室やATMコーナーからアクセスでき、この建築物を訪れる人々の中心となる空間である。もともと2層吹き抜けの空間だったが、機密性の高い営業室全体は新たに増築されたボリュームに内蔵される。このボリュームの開ロ部として、長いカウンターの窓口や、個別の相談に対応する相談室、特別なお客様をお招きする応接室などがロビーに面して配置されている。

広場とロビーを繋ぐ存在としてのコーヒースタンドが内外どちらに対してもサービスを提供できるように、風除室と同様の意匠で外壁の境界上を横断する計画としている。

2階は営業室の上に増築された床を利用したライブラリーとなっており、1階ロビーから伸びる檜円階段と西側の縦動線からアクセスできる。鉄骨造で増築され



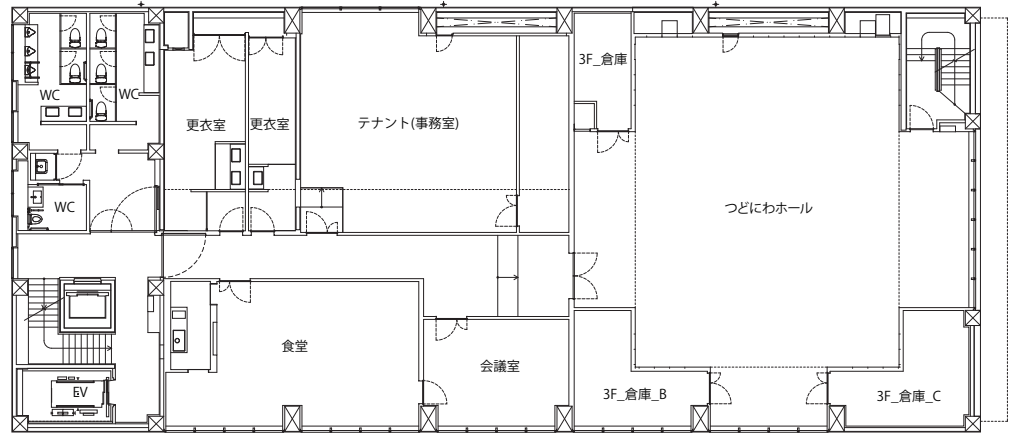
グランドレベルのつながり



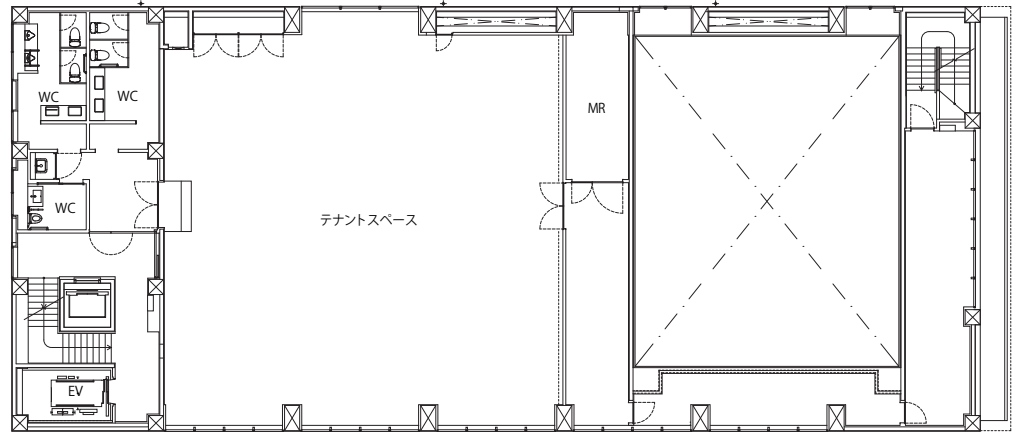
た2階床は既存躯体とエキスパ
ンション・ジョイントにより縁を切ら
れており、異なる構造特性を調整し
ている。ライブラリーには書棚や自
習机、コワーキングスペース
(ROOM_A、B)が用意されている。

3階はつどにわホール（大会議室）、
信用金庫職員のための食堂、会議室、
テナントの事務室が配置されている。
大会議室は既存建築物に建設当初か
ら備わっていた空間であったが、度
重なる改修で昨今はホールとして使
用せず天井を低く張って執務室と
して利用されていた。今回の改修では
本来の二層吹き抜けの姿に戻し、多
用途で利用できる空間とした。周辺
樹木の枝ぶりが最も良く見える高さ
であることから、開口部はそれらの
景観を取り込むように意識している。

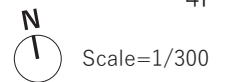
4階はテナントスペースと、マシン
ルーム（MR）が配置されている。テ
ナントスペースは建物の持続的な経
営の一翼を担うものであり、信用金
庫にとっても相乗効果をもたらす外
的な要素となる。個別の動線や設備
系統は確保しつつ、建物の魅力を伝
え自由度をもって計画できるような
スケルトンのあり方を模索した。



3F



4F



主な諸室について

1F ロビー



コーヒースタンドの客席や2階ライブラリーと一体的につながることで、およそ金融機関の窓口とは思えないような開放感と機能の複合が空間のなかで溶け合っているのが1Fロビーである。ロビー上部はもともと天井によって隠れていた構造体が荒々しく現されている一方で、外壁部の構造体には断熱の被覆と仕上げが施されることで快適さと上品さを兼ね備えている。大きな面積を占める県産材を用いた木ルーバー壁の背後には有

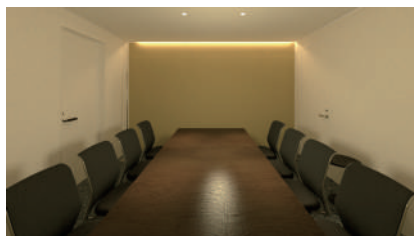
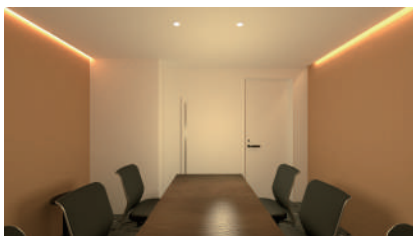
孔ボードとグラスウールが吸音壁としての役割を担い、大空間での快適な音環境を担保している。

コーヒースタンドは信用金庫の利用有無にかかわらず日常的に親しみのある場として市民に愛されるためには必要不可欠な要素であり、来客者にカウンター席やデスク席、2階ライブラリー、広場など多様な居場所を提供している。

1F 営業室



営業室は新たに増築した2階ボリュームに内蔵されているが、一部を2層吹き抜けとすることで北側のハイサイドライトから柔らかな天空光がそそぐ明るい執務空間となっている。一方で机上に適切な照度をもたらすために、照明器具をH形鋼の吊り材に取り付け、下がり天井に直付けする照明と高さを揃えることで室全体の一体感を高めている。窓口カウンターは営業終了後は閉鎖されるが、可動のガラス壁を使用することでロビーに信用金庫営業時間外も疎外感を与えない配慮がされている。



2F ライブラリー



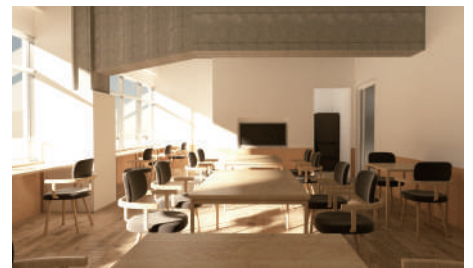
長大な書棚には信用金庫の価値観を映すような書籍が高崎のレベルブックスの店主、荻原貴男氏によって選書され、学生や社会人の継続的な学びの場として設えられている。書棚と吹き抜けに並行するようにロングカウンターが用意され、ほどよい賑わいのなかで学習や仕事に集中できる。コワーキングスペースはガラスの可動間仕切り壁によって仕切られ、多目的な会議やワークショップを行うことができる。

3F 大ホール

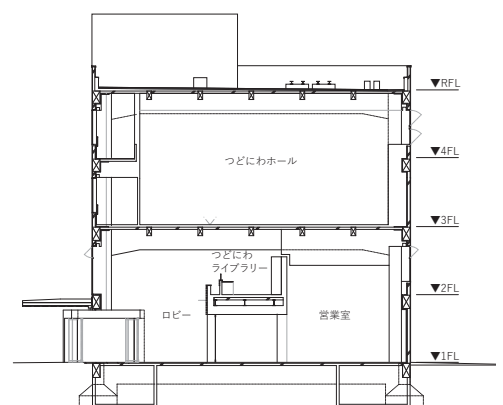
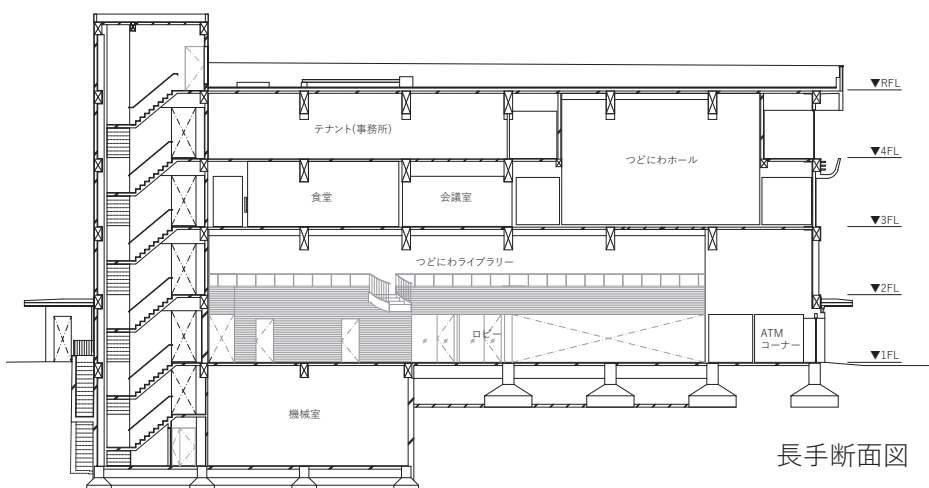


建築竣工当時存在した大会議室を現行法規に適應させつつ、SRC 梁を現しにして二層吹き抜けのダイナミックな空間を演出。吸音性を高めるために壁面はグラスウールマットを敷き詰めつつ、開口部に合わせた位置に中世建築における「アプス」のような付属空間が外の環境を内部に取り込む効果をもたらしている。

3F 食堂



社員食堂となるこの空間は腰壁から下を木材、腰から上の内壁をボード貼り、天井はコンクリート現しのハイブリッドな素材感が特徴的である。また、設計時は吊り天井を計画していたが、現場を訪れた際、既存梁やスラブのコンクリートが放つ荒々しさと天井高の高い開放性に魅了され、天井を張らない方向性で舵をとった。既存梁に残る銅の色をしたスリーブもなかなか味を出している。

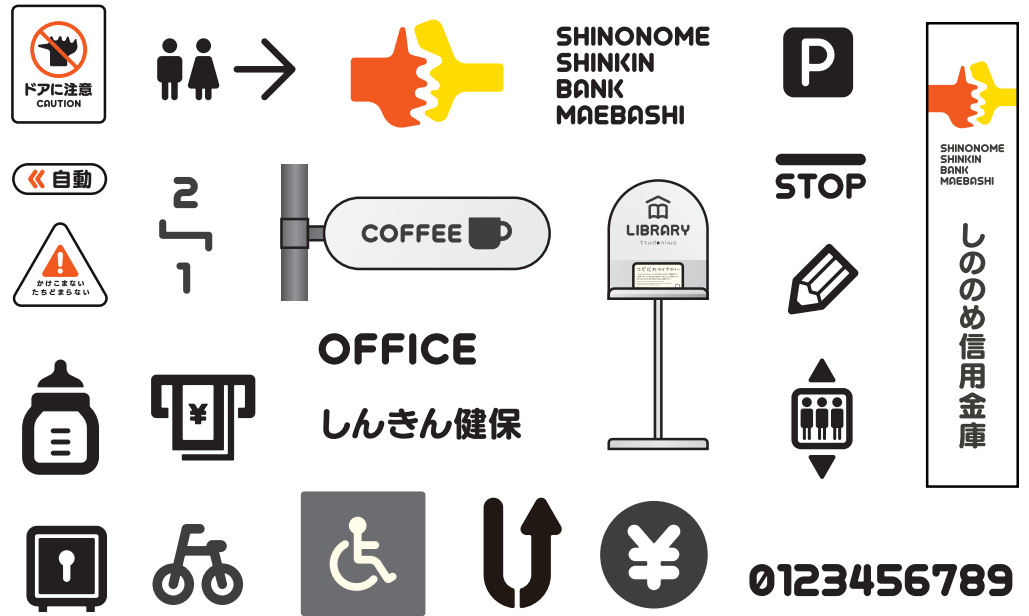


Scale=1/400

サイン計画

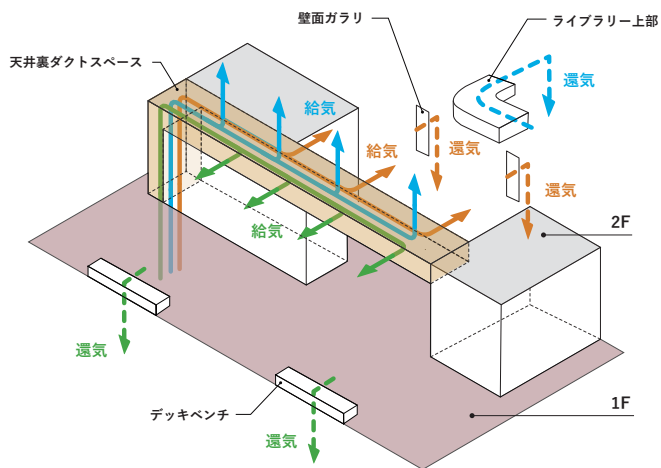
大々的にフルリノベーションされた建物から感じ取った包容力と心地良さ。要所に見られる滑らかにカーブしている造形美。そんな印象やディテールをイメージしつつ、ロゴに関しても合わせてフルリノベーションしてはと提案した。この流れでリデザインした「握手マーク」と相性の良い「SHINONOME SHINKIN BANK MAEBASHI」ロゴタイプ。このロゴを軸に、水平思考しながら様々なサインデザインへと発展させていった。主要な場所に表記されたサインを始めとして、自動ドア回りに表示されている小さなサイン、駐車場に表示された大きなサインまで一貫性を持ってデザインすることができた。

(佐藤正幸/Maniackers Design)



佐藤氏によるグラフィックデザイン制作物一覧

機械設備



1-2階ロビー吹抜空間の空調ダクトルート

本建物の全館リニューアル工事では、内部空間諸室の大幅な見直し計画に沿って、既存の空調換気設備、給排水消火設備を最新の設備に全更新する計画としている。

更新にあたっては、イニシャルコストの低減を図りながら、今後のライフサイクルコストを重視して、最新の高效率機器の採用および設備手法等により省エネルギーを図っている。

具体的には空調設備においては、天井の高い空間への居住域空調や床吹出空調、小空間諸室への変風量機構内蔵型アネモの設置、換気設備においては、全熱交換機とCO₂制御による外気負荷低減と利用形態による適切な室外機系統分けを行っている。

給排水消火設備においては、直結給水ブースターポンプによる給水と節水型衛生器具を採用している。消火設備においては、水源容量・ポンプ容量、配管サイズを最小化できる操作性の良い広範囲2号型消火栓としている。また、既存の設備シャフト関係は無駄にすることなく配管経路に有効活用している。

(村瀬豊/テーテンス事務所)

電気設備

本建物の全館リニューアル工事では、機械設備と同様に既存の電気設備、防災設備を最新の設備に全更新する計画としている。

電力システムは、ハザードマップの浸水範囲外ではあるが、北側道路、東側道路共に0.5m未満の浸水が予想されているため、既存の地下電気室にあった受変電設備を万一に備えて屋上に設置して電力遮断がないように計画している。

受変電設備は経済的かつ管理が容易であることから、既存の開放型からキュービクル式に見直しを行っている。また、非常用発電機についても同様に屋上に設置することで、浸水により電力遮断がないように計画して防災負荷以外に多数の利用者が見込まれる1階の照明等に電源を供給することで、銀行機能の安全性を高めることはもちろんのこと、災害時に安全に避難・誘導ができるように計画をしている。

盤配置計画は共用系を階別に専有部系を専有部ごとに盤を配置することで、負荷の明確化を図り将来の電力計量や負荷の増設が発生しても支障がないように計画をしている。

EPSは将来の幹線増設、別途工事による通信幹線の敷設が可能なように地下から受変電設備までの主ルートにはケーブルラックを敷設している。電灯コンセント計画は意匠性を重視ながらも什器を考慮した配置計画とし、特にコンセントについてはPC等通信機器電源への配慮として十分な個数を設置している。

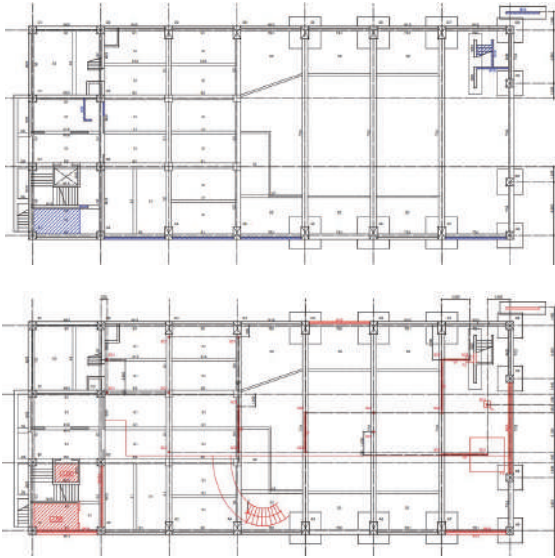
拡声設備は更なる安全性の確保と将来の使用方法を考慮して非常放送設備として計画している。大ホールはローカルアンプを設置して会議等の用途で使用できるようワイヤレスマイク用アンテナ等を設置している。また、スピーカー配置は広い空間に対応した意匠性と明瞭度を兼ね備えた計画としている。

トイレ呼出し設備は各階多目的トイレ以外に1階の一般者トイレ、授乳室にも設置して一般利用者に不測の事態が発生しても安心して使用できる計画としている。

自動火災報知設備、誘導灯設備は消防法、非常照明は建築基準法に基づき計画している。

(岡田一宣/ルナ・デザイン・ラボ)

構造



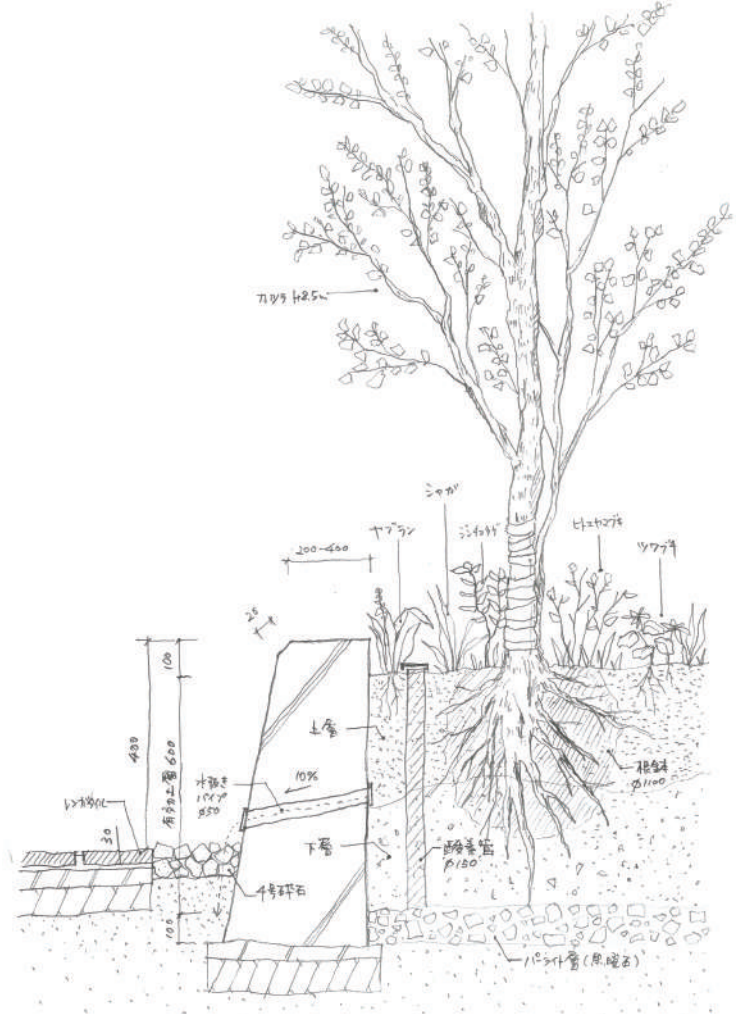
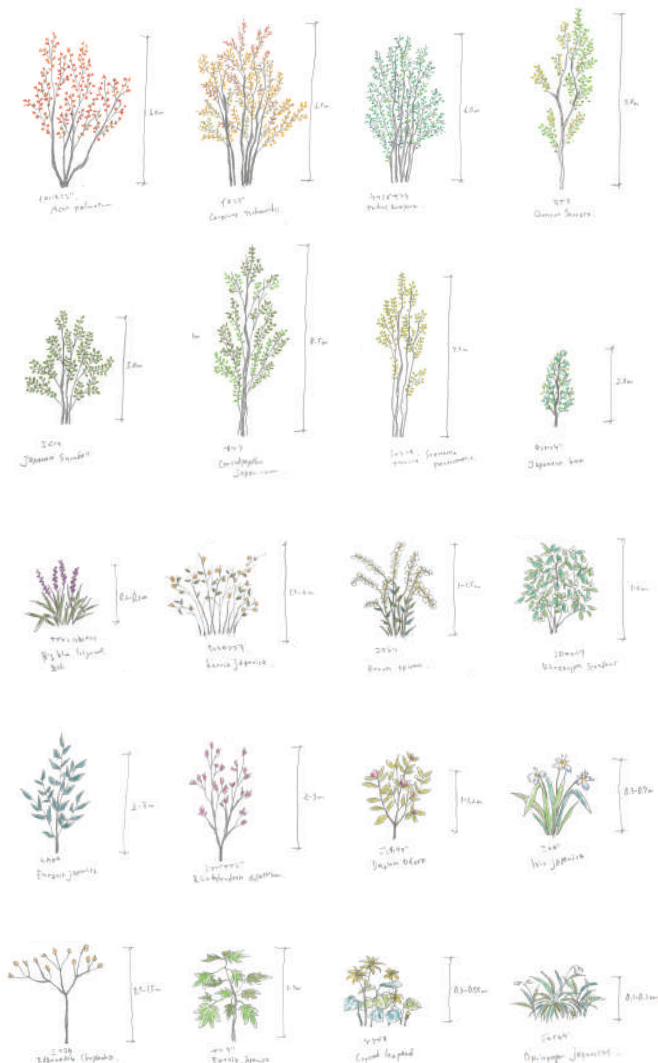
壁位置の構造図

本計画は、昭和 38 年竣工の SRC 造建物の増築・改修計画である。建物規模は地上 4 階、地下 2 階、塔屋 1 階で一辺 5.4m の正方形グリッドが南北方向 3 スパン東西方向 7 スパン並んだ整形な長方形平面である。西端 2 フレーム、東端 1 フレームを除いた、内部 5 フレームが 16.2m スパンの架構で無柱空間となっている。既存建物に対して 2015 年に行った耐震診断(2次診断)では、建物 1、2 階の耐震指標が基準値 Iso=0.6 を下回る結果であり、何かしらの「弱点」を抱えている。今回の建物における弱点は、主に壁の偏在によるものであった。道路に面した東面と建物正面となる南面は壁が少なく、西面及び北面には耐震壁が配置されていることで偏心の大きい建物となっていた。一方、躯体コンクリート強度は設計基準強度を概ね満足しており、部分的にひび割れの発生が見られる箇所はあるが躯体の劣化が問題となる程度ではなかった。そこで、耐震補強の方針としては建物の偏心を改善するよう、東面と南面を中心に耐震要素の追加(壁の増設、増し打ち、開口閉塞)を行った。補強箇所としては各階、各方向で 1 又は 2 箇所である。(岡山俊介/金箱構造設計事務所)

ランドスケープ

リゾームごとの植栽によって多様な場となるよう計画している。例えば広場に植えられた大きな木々は、まっすぐ上に伸びる木もあれば、横に広がって枝葉を伸ばす木、片方に偏って伸びる木など個性豊かな樹形の木々を植えた。目線を下げて木々の足元をみるとここにもまたたくさんの草花がある。その多くは前橋で本来多く見られたこの地域の在来種の草花。季節ごとに花をつけたり実がついたり紅葉したりと、広場全体に季節感を与えてくれる。建物に近いところには丈の低い小さな草花があり、広場の中央には東西を抜ける風で揺らぐ比較的高い草花を植えている。

(大野暁彦/SfG landscape architects)



植物リストと断面スケッチ(イラスト制作:村越勇人/HAGI STUDIO)

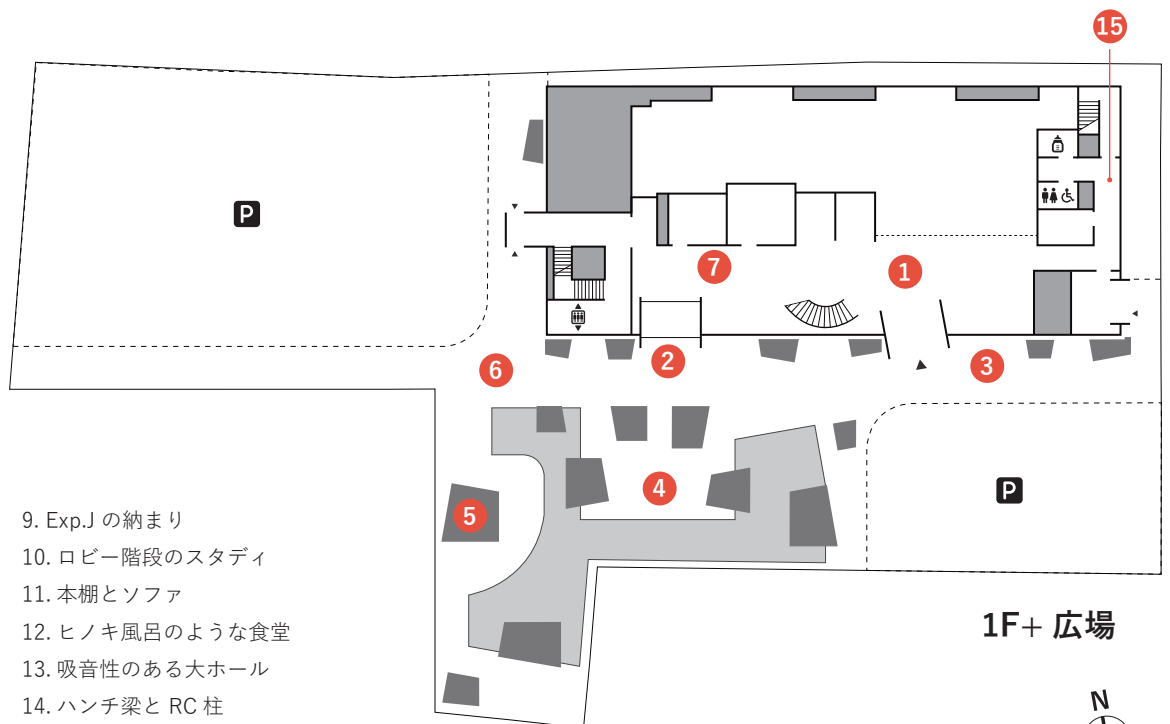
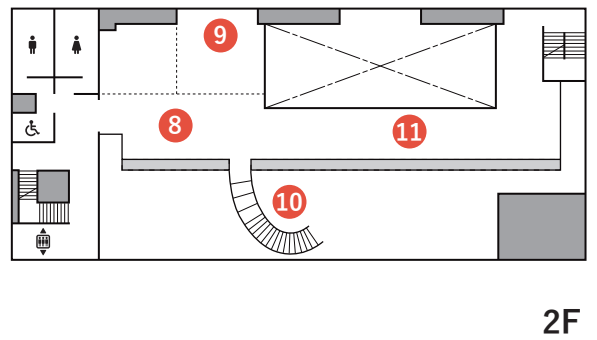
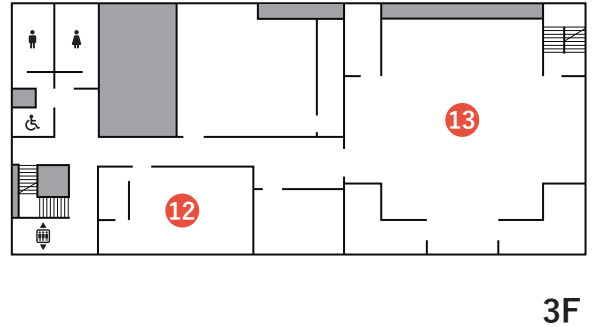
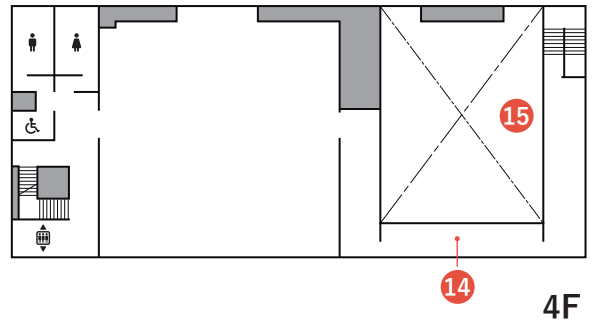
アイデア集

今までにない信用金庫をつくるために、各部のディテールやプロポーションの考え方、色、素材の扱い方など、あらゆるものを一から開発するように細部まで検討を行った。

そのアイデアと挑戦の数々を、実際の建物に足を運んで見つけてほしいと考えた。

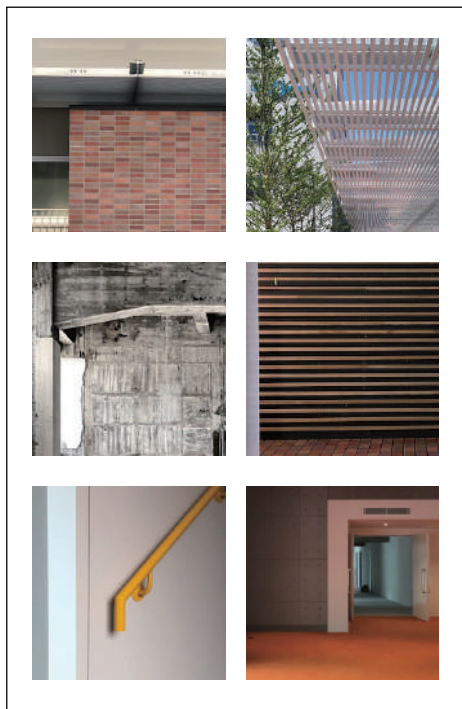
右図には館内マップと番号を割り振った。次項より各番号ごと図版とテキストを添え、思考の痕跡を示している。

図版は、具体的なディテールのわかる詳細図だけでなく、ライブ感のあるスタディ中の写真、現場で描いたスケッチ、仕組みや考えを示したダイアグラムなど一つのプロジェクトに対する多角的な視点を表現している。



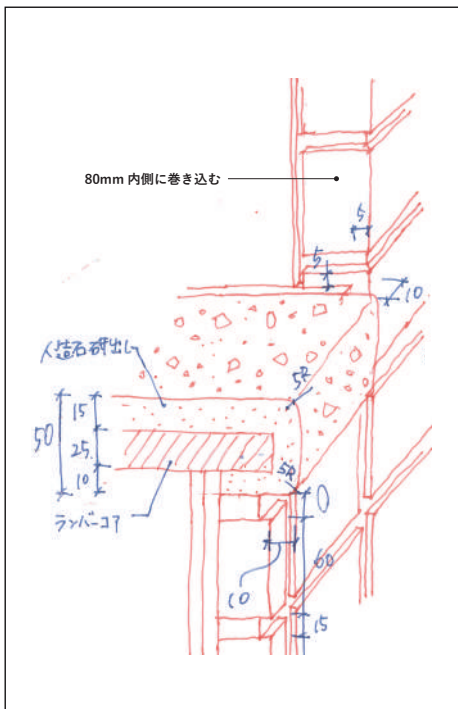
- 1. カラーと MATERIAL
- 2. 赤いカウンター
- 3. 環境装置となる外部庇
- 4. ウッドデッキの囲い
- 5. 高さの異なるリゾーム
- 6. レンガタイルのパターン
- 7. 県産材不燃木ルーバー
- 8. コワーキングの使い方
- 9. Exp.J の納まり
- 10. ロビー階段のスタディ
- 11. 本棚とソファ
- 12. ヒノキ風呂のような食堂
- 13. 吸音性のある大ホール
- 14. ハンチ梁と RC 柱
- 15. 垂直方向の広がり

1 カラーとマテリアル



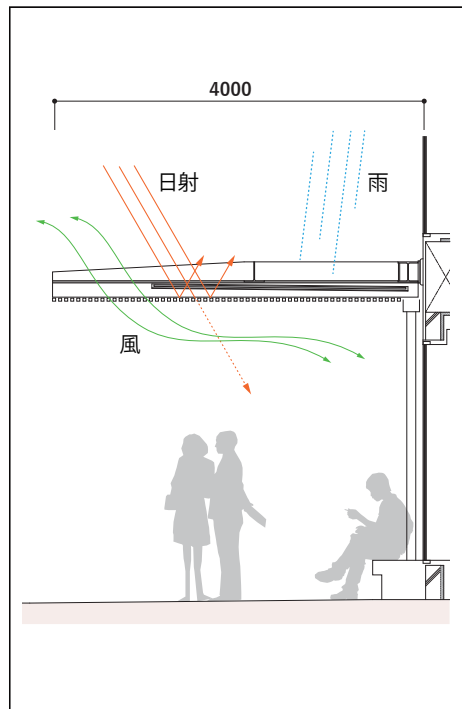
多様な表情を見せるレンガの赤色、建物の外壁は少し温かめのコンクリートグレー、ロゴをモチーフにしたイエローとオレンジ。建物と場所、そして会社のロゴを俯瞰的に捉えながら、地域に寄り添うカラーやマテリアルを考えた。

2 赤いカウンター



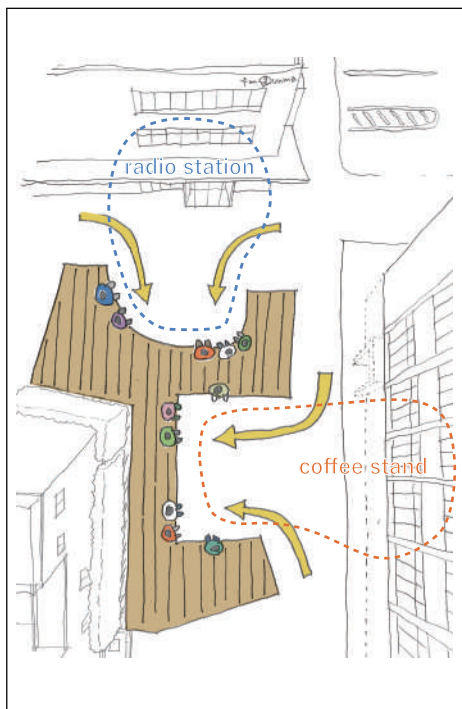
一般的に天板下端は難しいとされる人造石研出しだが、今回はカウンター全面の研出し仕上げにチャレンジ。また、種石に赤い骨材を混ぜて研磨することで周囲のレンガタイルとの一体感を生み出した。

3 環境装置となる外部庇



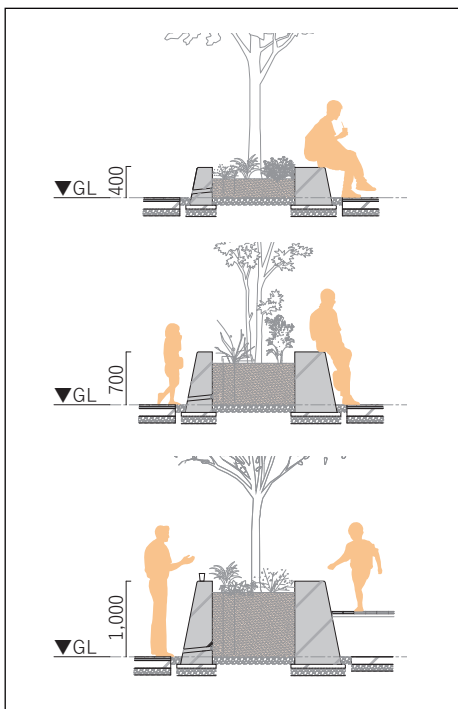
庇の高さはエフエム群馬と共通させ、片持ちで4m張り出す計画とした。小断面のアルミルーバーによって、日射をコントロールしつつ広場へと引き込む方向性を与えている。部分的にガラスを入れ、雨避けとしての機能も持つ。

4 ウッドデッキの囲い



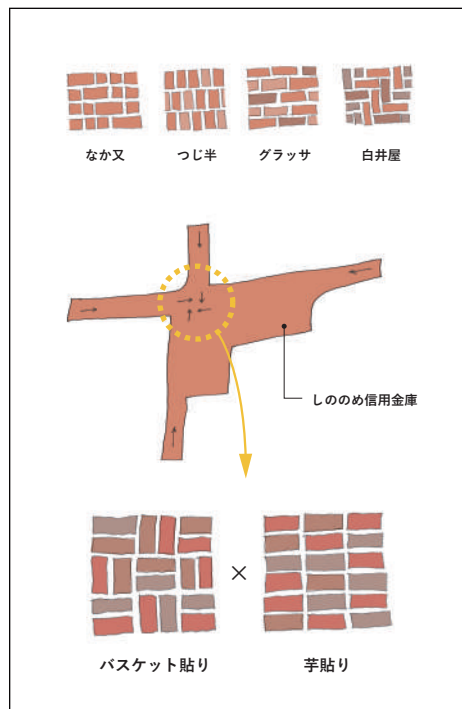
ウッドデッキには2つの囲まれた居場所を設計した。コーヒースタンドとエフエム群馬側に向けて囲うことで人々の「つどう」をデザインに落とし込んでいる。また、階段の端部はリブありとすることで防滑性を高めた。

5 高さの異なるリゾーム



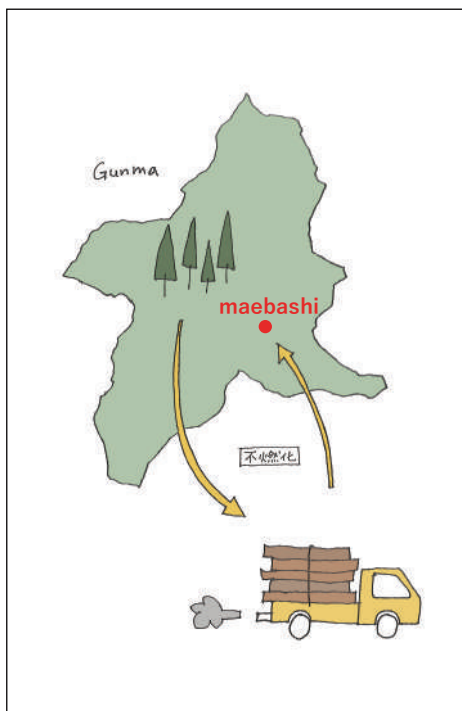
人の動線や所作に合わせて、平面と立面に緩く角度をつけた台形とし、周辺機能に呼応して様々な使われ方を誘発するように、高さにもいくつかのバリエーションを持たせている。

6 レンガタイルのパターン



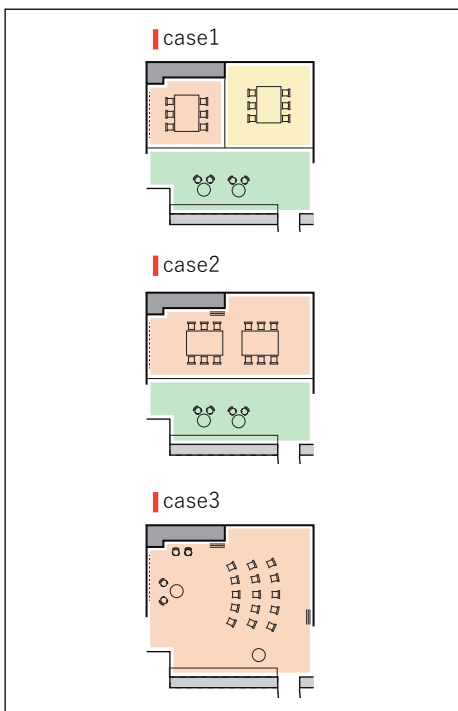
広場の大部分の舗装で使われているレンガタイルは人が歩く方向性に沿うように芋目地を基本とした。そして、中央部で人々が集うエリアでは縦横の芋目地が出会うように一部バスケット貼りにして変化をつけた。

7 県産材不燃木ルーバー



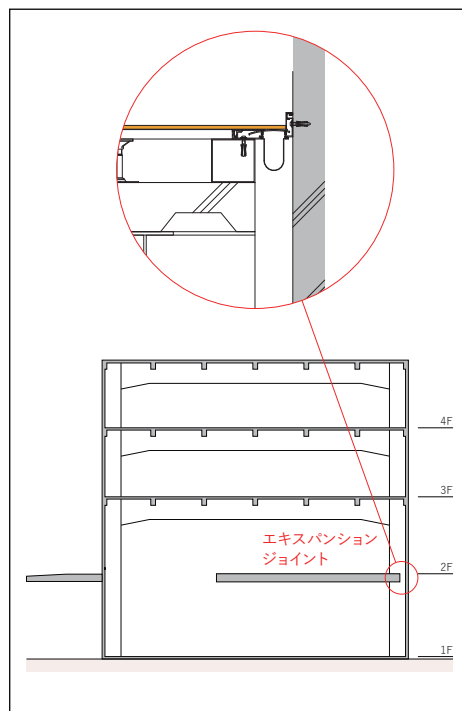
お客様を一番最初に迎える正面の壁は、群馬県の県産材であるスギを不燃化処理して使用している。増築部分に木材を使用することで、既存建物との差別化を図った。

8 コワーキングの使い方



ROOM_A、B とつとにわライブラリーはガラスの可動壁で仕切られている。仕切り方によって数名での利用から 20 名前後の利用形態まで対応できる。すべての可動壁を開放することでライブラリーと一体利用することも可能である。

9 Exp.J の納まり



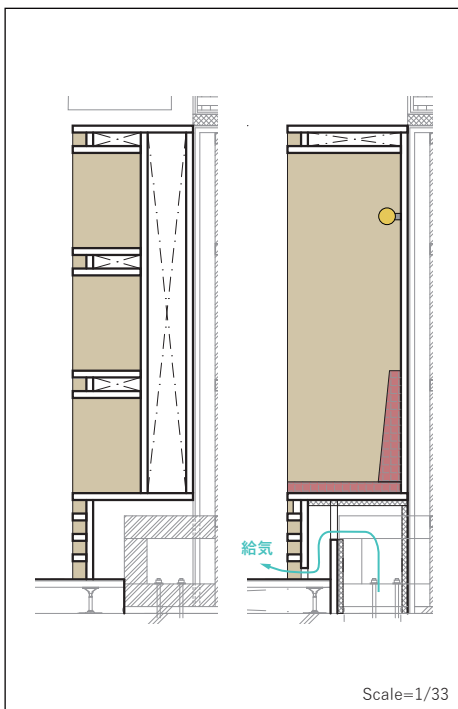
2 階はエクspansionジョイントにて建物本体と構造的に独立させている。エクspansionジョイントが目立ちすぎることがないように、壁・床は仕上材が連続するようにカバーの仕様を工夫した。

10 ロビー階段のスタディ



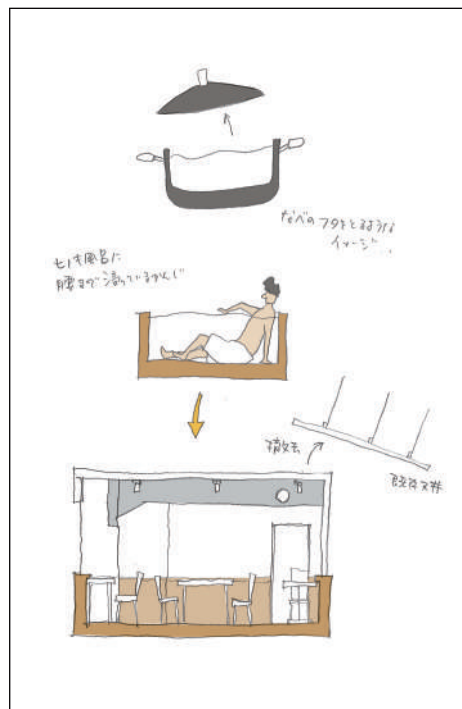
ロビーの中央部に位置する楕円階段は 3 つの円弧から構成され、手摺子に関しては 133 本すべての長さが異なる。ロビーの大きな吹抜空間に華麗な円弧を描くことで 2F ライブラリーにシームレスにアクセスできるようにしている。

11 本棚とソファ



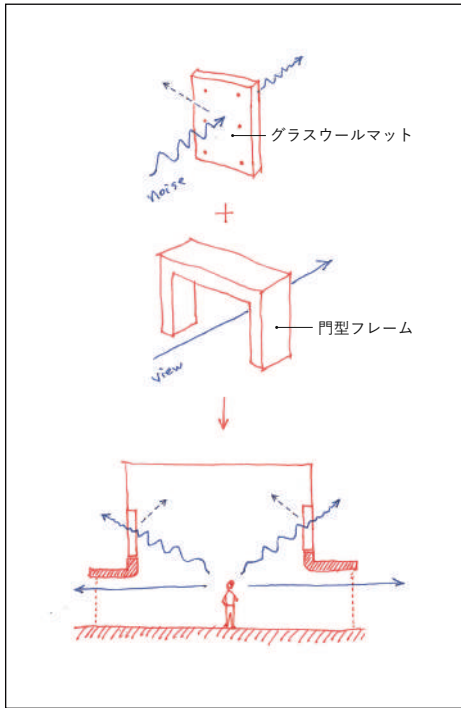
細長い形状のライブラリー空間を強調するようにタモ材のルーバーが奥に奥に伸びている。ルーバー間はメラミンでブラックアウトさせ、その隙間にコンセントを仕込んでいる。本棚の足元は部分的に空調の吹出口を設けている。

12 ヒノキ風呂のような食堂



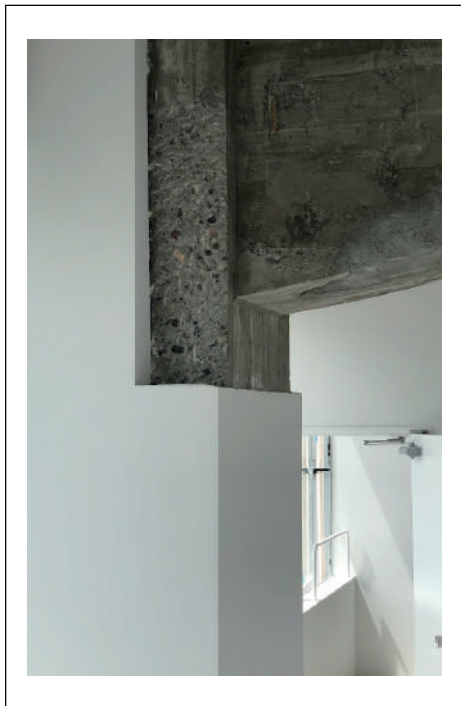
社員食堂は業務を忘れリラックスできる環境にしたいと考えた。腰壁と床を木質化させることで体半分を木に包まれた、ヒノキ風呂のような心地よい空間を目指した。また、既存天井を剥がして開放感のある食堂にした。

13 吸音性のある大ホール



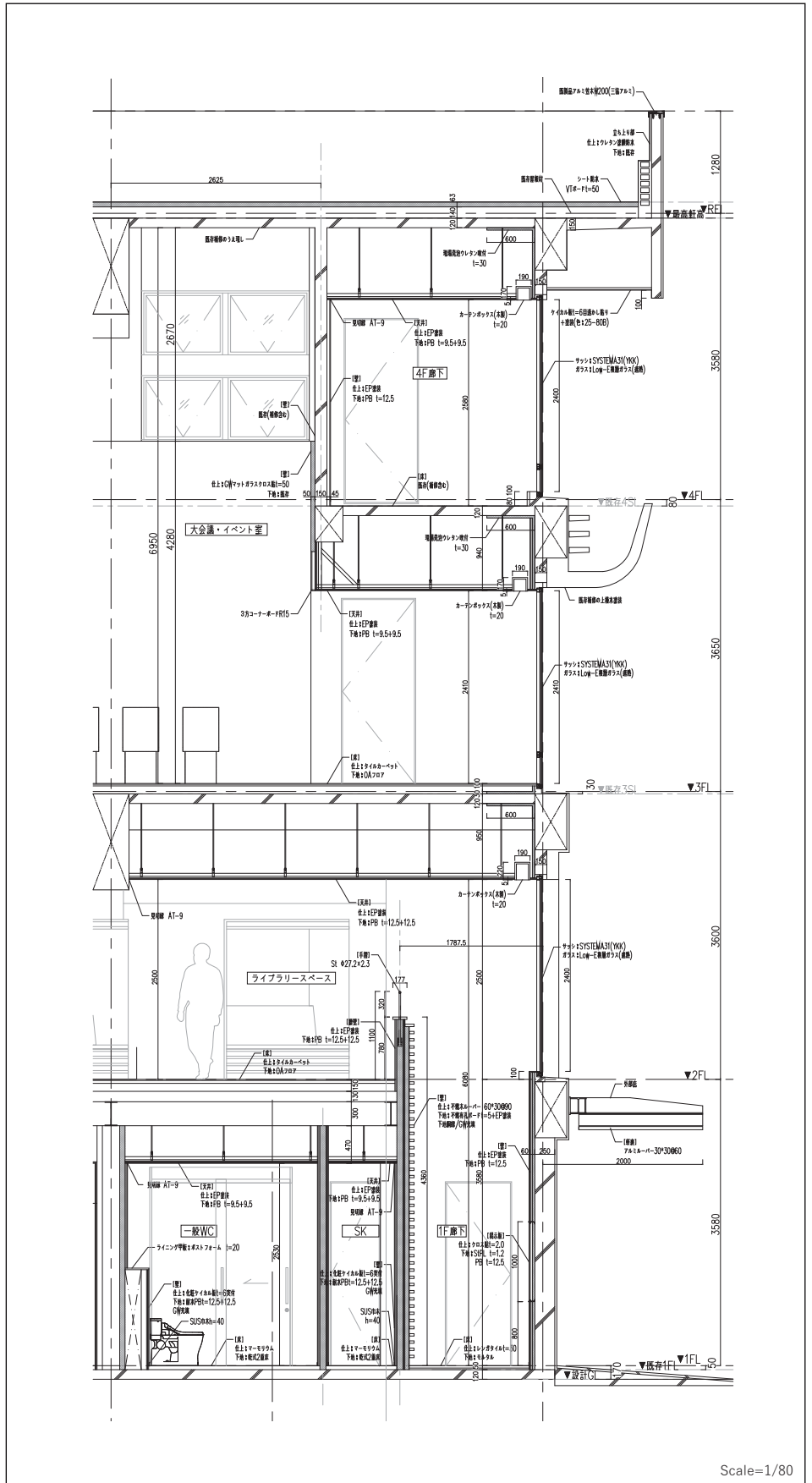
かつてホールとして使われていた記憶を取り戻すために、吊り天井を撤去し、大スパンの梁と天井スラブを露出。大ホールとして吸音性を向上させるために壁半分をグラスウールマットで構成し、開口部に対して門型フレームをつくっ

14 ハンチ梁と RC 柱



あまり人目にさらされない廊下に、隅部が斜め形状のハンチ梁がある。4F 廊下は、通路幅も天井高も比較的小さい空間のため、より柱と梁のインパクトが強い。柱周りは断熱を確保しつつ、ハンチ梁を印象的に見せた。

15 垂直方向の広がり



Scale=1/80

1F と 3F では、天井を撤去することで、かつて天井によって隠されていた二層吹き抜けの無柱空間を露わにしている。通路や室のプロポーシヨンの工夫、高窓や印象的な形状の階段等によって、垂直方向への広がり、より強調されるように計画した。1F の広場との平面的な連続性、3F のケヤキ並木への視線の抜けといった水平方向の広がりから天井を見上げる垂直方向の広がりへ、視点切り替わるように演出している。

基本情報

【所在地】 群馬県前橋市千代田町 2-3-12

【主要用途】 事務所

【工事種別】 既存利用改修及び一部増築

【規模】

敷地面積 2,276.51 m²

建築面積 810.40 m²

延床面積 2,473.31 m²

建蔽率 35.59%

容積率 106.97%

階数 地下2階 地上4階

【寸法】

最高高 18.42m

軒高 14.35m

階高 B2F : 2,725 mm B1F : 2,745 mm 1F : 3,580 mm
2F : 3,600 mm 3F : 3,650 mm 4F : 3,580 mm

天井高 B2F : 2,575 mm B1F : 2,575 mm 1F : 2,530 mm
2F : 2,650 mm 3F : 2,650 mm 4F : 3,480 mm

主なスパン 5,400mm×5,400mm

【敷地条件】

地域地区 商業地域 準防火地域

道路幅員 東 27.0m 西側 6.0m

駐車台数 25 台

【構造】

主体構造 SRC 造

杭・基礎 直接基礎

【設備】

空調設備

熱源 空冷 HP 式ビル用マルチエアコン、
空冷 HP 式室外機一体型エアコン

空調方式 単一ダクト方式、
床吹出空調 (2F つどにわライブラリー)、
天井カセット室内機

換気 全熱交換機、外気取入 CO2 制御 (3F つどにわホール)

衛生設備

給水 直結給水ブースターポンプ

給湯 電気温水器

排水 汚水、雑排水合流、下水放流

電気設備

受電方式 高圧受電、屋外キュービクル

設備容量 単相 150KVA、三相 200KVA

非常電源 屋外ディーゼル発電機 30KVA

防災設備

消火 広範囲 2 号型屋内消火栓

排煙 自然排煙、国交省告示対応

警報 自動火災報知設備、非常放送

避難誘導 非常用照明、誘導灯

昇降機 小荷物用 EV (フロアタイプ)
乗用 EV (13 人乗り)

【工程】

設計期間 2019 年 12 月～2021 年 7 月

施工期間 2021 年 7 月～2022 年 7 月

関係者一覧

建主 しのめ信用金庫

横山慶一 長谷川登 神宮勝巳

谷川智明 宗形直樹 布施川順哉

設計

建築 HAGI STUDIO

宮崎晃吉 田坂創一 小泉大河 村越勇人

トゥイズムデザインスタジオ

木原ソトム

構造 金箱構造設計事務所

岡山俊介

機械 テーテンス事務所

村瀬豊 福井あかり

電気 ルナ・デザイン・ラボ

岡田一宣 神谷美加

ランドスケープ SfG landscape architects

大野暁彦

プロジェクトデザイン トーンアンドマター

広瀬郁

サインデザイン Maniackers Design

佐藤正幸

施工

建築 小林・宮下特定建設工事共同企業体

秋山剛志 羽鳥和行

機械 伸高設備工業

品川諭 森輝明

電気 中央電設工事

福島透

造園 群馬清風園

木暮一広

アート Lu / Yoshiaki Shimbo

コーヒースタンド SHIKISHIMA COFFEE STAND

櫻井喜明

選書 レベルブックス

荻原貴男

写真 千葉正人

パンフレット制作 村越勇人 小泉大河

HAGI STUDIO

tel 03-5834-7018

mail info@studio.hagiso.jp

web studio.hagiso.jp

instagram @hagistudio



web



instagram

